

## 寒川町立寒川東中学校

研究テーマ： 「躍動する授業づくり」ータブレット端末の効果的な活用ー

### 1 実践の目的

「躍動」は開校以来の学校だよりのタイトルであり、その名は1階多目的ホールの正面を飾る大壁画(レリーフ)に由来している。レリーフ「躍動」は子どもたちが生き生きと活動する姿と未来への希望を表現し、そこには生徒達が本校の伝統を創っていくという自覚と責任を持ち、前向きで意欲的に育ってほしいという願いが込められている。本校では、学校教育目標である「ゆたかな心とたしかな力」をめざし、より良い学校生活を創り出すための挑戦を日々続けている。令和元年には「GIGA スクール構想」が打ち出され、その後のコロナ禍の影響もあり、令和2年度末までに全国的に1人1台端末、高速大容量の通信設備の整備がなされた。本校では令和3年度からタブレット端末の活用をテーマとした研究に取り組み、授業におけるタブレット端末の活用に一定の進展が見られた。

今年度は、昨年度に引き続き「各教科や各学習場面においてどのような使い方が効果的か」を研究の柱とし、本校で令和2年度まで研究を行っていた、「教えて考えさせる授業の理解確認、理解深化の課題設定・授業展開作り」を継承しつつ、タブレット端末を活用することで子どもたちが生き生きと授業に取り組み、確かな力を着実に身につけさせる授業づくりをめざし、今回の研究テーマを設定した。

### 2 実践の内容

#### (1) 学校経営方針との関連

##### ①授業を核とした指導力の向上

- ・生徒に身につけるべき力を習得させるための適切な指導力の向上を図る。
- ・教師の説明と理解確認を精選し、生徒を理解深化に導くための授業づくりの工夫を行う。
- ・タブレット端末の効果的な活用についての研究を行う。

##### ②確かな力を育てるために

- ・ICT 機器(タブレット端末)の効果的な活用を行う。
- ・タブレット端末により、何ができるのかを明確にする。
- ・本時の目標、及び生徒の学習意欲を引き出すための一手段として、タブレット端末を効果的に活用する。

#### (2) 大切にしたいスタンス・考え方

- ①千里の道も一歩から(最初は誰も初心者)
- ②支持的風土(どのようなレベルの実践でも認め合える雰囲気)
- ③全職員の研究への参加

なお、本研究の第一の目的は、「より良い授業」を構築するために「タブレットというツールをどのように活用できるか」にある。タブレット端末の活用を優先するあまり、授業の流れに無理が生じ、学習目標があいまいになることは本末転倒である。研究にあたってはその点を十分に踏まえ、取り組んでいく必要がある。

### (3) 研究内容

- ①生徒アンケートを実施し、タブレット端末等の効果を把握する。
- ②夏の校内研究会に講師を招聘し、タブレット端末の活用についての見識を深める。
- ③毎月校内研究会を実施し、タブレット端末の活用方法について学び合う。

## 3 実践の成果

### (1) 夏の研究会を踏まえた課題とまとめ

- ・教科ごとに指導案検討会を実施し、深い意見交換を行い、研究発表会に向けて準備を整えることができた。

### (2) 町研究発表会(10月10日)での講師(佐藤先生)の助言とまとめ

- ・今後の学習指導要領ではICT機器を使うことを前提として考えられるので、自分の学校の現在の立ち位置を把握する必要がある。
  - ・タブレット端末の使用に関しては、1人1台使うことが前提とし、従来のインプット中心の授業を今後はアウトプット中心の授業にしていくべきである。そのためには、タブレット端末を使用するかどうかは教師が指示するのではなく、子どもに決めさせていくことが望ましい。タブレット端末を効果的に活用させるためには、タブレット端末の使い方やアプリケーションの使い方を生徒も教師も理解していることが必要不可欠である。
  - ・タブレット端末を活用したより良い授業をさらに目指すために、教師の今までの授業観、指導観を変換する必要がある。誰かがやるのではなく、「全員の先生ができるところからやる」という姿勢は、今後も大事に持ち続けることが大切である。
- 本校では、職員全員で研究テーマである「躍動する授業づくり」に取り組んできた

ことで有意義な研究発表会を迎えることができた。

## 4 今後の展開

本校では、躍動する授業を目指して、全職員が一丸となってタブレット端末の活用について研究を続けてきた。試行錯誤しながら実践を積み重ねていく中で、授業におけるタブレット端末の活用に一定の進展が確認された。また、それらを用いた授業が生徒の学習意欲を高め、知識、技能の習得や探究活動においても効果的であることもアンケートから明確になった。研究当初は、「タブレット端末の活用について即効性がある利用方法」を求める傾向もあったが、現在は「各教科や各場面においてどのような使い方が最も効果的か」という視点を重視して、教科会や実践報告などで日々研究実践を続けている。

一方で、今回の研究から、

○思考力を育成するためのICT機器の活用の工夫

○検索によって『正答』を得た」ことが「できた」と認識してしまう生徒への対応

○協働学習におけるタブレット端末の効果的な活用

○家庭学習におけるタブレット端末の有効な活用方法

といった課題が見えてきた。

今後は生成AIが教育にも導入される等、タブレット端末の活用が益々盛んになる。そのような時代に我々教師は、生徒の資質・能力を伸ばすために適切な指導とはどういうものなのか、どの場面でタブレット端末等を活用すればより効果的なのかを常に意識する必要があると考えている。今後も生徒が「躍動する授業」を目指し、研究を継続していきたい。